



張大千「秋為人清」紙本 97.6×45 cm 扁額

款識：蜀人 張爰



張大千「健圓」

玉川堂の筆について、筆の四徳（名筆の四つの性質）について書いたもの。これは山馬筆で揮毫したようだ。

「先が鋭い、そろっている、弾力がある、よく回転する」

款識：玉川堂名筆、蜀人張大千題贈。

お世辞に過ぎないだろう。筆屋の宣伝である。粉飾。



張大千「行書七言對聯」1947年
紙本 161.5×30 cm×2

「常記高人右丞句」「爲憶名言玉局翁」
款識：集進道青玉案、晦庵鷓鴣天句、書於大風堂下。立己仁兄法家正之、丁亥十月大千張爰。

1978年（79歳）台湾に移住。台北に住み、そこで死んだ。

ピカソに会いに行ったりした。

中国画に西洋の技法を取り入れる。

印象派やキュビズムの影響を受け、

1953年（54歳）ブラジルに移住。

1951年（52歳）アルゼンチンに移住。

1948年（49歳）香港に移住。その後、台湾、インド、ブラジル、アメリカなど国外に20年以上滞在した。

1940年（41歳）から2年7ヶ月間、敦煌の莫高窟に住み込み、壁画の模写に専念。

1917年（18歳）京都へ留学し3年間、染色を学んだ。

徐悲鴻から500年に1人の画家と称賛された、国際的な芸術家である。

澆墨という技法、破墨を彩色に応用した（澆墨澆彩）。

山水画、花卉画が得意。とくに蓮の花の絵が独特である。晩年は水墨画に専念し、

古典的な中国画の技法と現代の新しい技法を融合させて、西洋と中国の融合に挑戦した。

中国の伝統芸術を現代に甦らせた芸術家。贗作者としても有名。

「中国伝統絵画の大百科全書」といわれた。

名は正権、後に爰、字は季爰、号は大千居士など。

張大千（1899～1983） 四川省内江の出身。書画家、篆刻家、詩人。



ピカソと





張大千「廬山図巻」1981年 180×1008 cm 台北故宮博物院張大千紀念館蔵 澆墨澆彩画法による表現



張大千「黄山雲海」1981年 絹本 50×89 cm



張大千「澆彩山水」1953年 144×356 cm
抽象表現主義の影響を受けている。



張大千「紅衣達磨」1944 年作
紙本 75.5×49 cm



張大千「梅花仕女」軸 98×41 cm



張大千「蘭草」1948 年作 團扇 直徑 26 cm
款識：戊子十月寫似 藕姑夫人大家法正 蜀人
張大千爰 鈐印：張爰之印 大千



張大千「蓮」1979 年作



張大千「水殿暗香」1981 年作 紙本 橫幅 75×142 cm



張大千「春曉誦經」1948 年作
團扇 絹本 直徑 24.5 cm



張大千「蘭花」1963 年作
絹本 直徑 20 cm

款識：癸卯之八月爰翁



張大千「溪山遠眺并行書」1948 年作 成扇

款識：（書）虎豹耽之守．．．游仙詩并爲孟
和仁兄法教張爰。



張大千「澗彩荷花」紙本 56×91 cm



あいしんかくらふじゆ
愛新覺羅溥儀（1896～1963）北京出身 清朝宗室の出身。

溥儀の従兄弟。名は儒、字は心畬、号は西山逸士。

画家、学者、書と詩も優れ詩書画三絶と称された。国立北京芸術専科学校教授。

辛亥革命後は、北京の西山台戒寺に隠棲し、読書と書画の研究をした。山水は北宋の大家に学び、山水を得意とした南方の張大千と「南張北溥」と併称せられた。



溥儒「碧溪清涛水閣涼」
1953年 紙本 53×26 cm



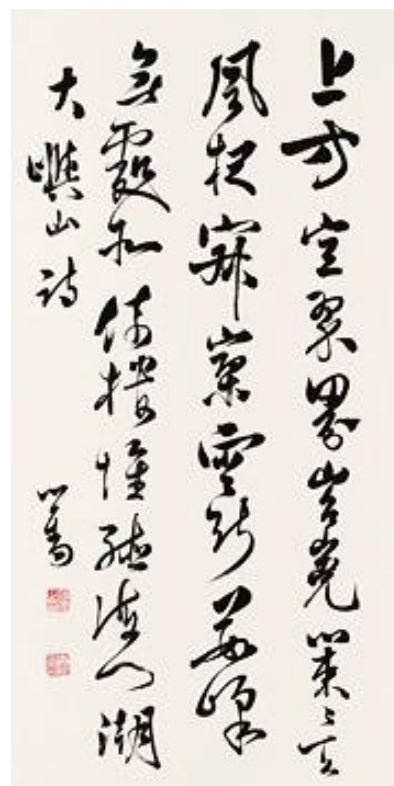
造物本無私 移來檻外煙
雲適開勝境 數五先生之屬

溥儒「楷書十五言對聯」
1936年
紙本 132×32 cm×2



人品無瑕玉界尺
文章有骨繡屏風

溥儒「行書七言對聯」
紙本 131×31 cm×2
釈文：人品無瑕玉界尺・文章有骨繡屏風



溥儒「行草書軸」紙本 91.5×45.5 cm
釈文：上方空翠界蒼嵬策々天風夜寂寥雲斷數峰無處取倚樓惟听海門潮大嶼山詩。



溥儒「梅花仕女」1947年 紙本 52×135 cm



溥儒「居之安」行書 紙本 30×66.5 cm

「甲骨四堂」(または、甲骨学四堂)

甲骨文字が、1899年、河南省安陽市小邙村付近(殷墟)で王懿榮や劉鶚によって発見された。以前から農民たちによって発見はされていたが、かれらは、その文字の重大さには気づかなかった。気づいたのは王懿榮と劉鶚である。しかし、王懿榮は1900年、列強の北京侵攻のとき、自殺してしまった。

甲骨文字研究の開拓者である、羅振玉(号・雪堂)・王国維(号・觀堂)・郭沫若(字・鼎堂)・董作賓(字・彦堂)の4人を「甲骨四堂」と称する



羅津玉(1866~1940) 浙江省上虞の出身

字は式如、叔蘊。号は雪堂、陸庵など。考古学者、教育者。

甲骨文字の研究に打ち込み、甲骨文や敦煌出土の文物の収集と整理をした。紫禁城の古文書(明清代の皇帝文書)を、私財を投じて保存した。

南宗画論者で王羲之の伝統を尊ぶ帖学派。甲骨学の基礎を固めた。

1891年、劉鶚と知り合い、劉鶚のあとを継いで甲骨文の研究をした。

1896年、上海に東文学社を設立(日本語の翻訳者養成学校)

1909年、ポール・ペリオと会い、敦煌残された文物を北京に運ばせた。敦煌学にも貢献した。

1910年、甲骨の出所を小邙村(殷墟)であると突き止めた。

1911年、辛亥革命後、王国維とともに京都に亡命し、7年間滞在し旧知の内藤湖南や狩野直喜らと交際した。

1914年、『殷墟書契考釈』『殷墟書契菁華』『流沙瑣簡』を出版。

『流沙瑣簡』は敦煌文献の研究書で王国維との共撰。

1932年、3月満州国成立。満州国の参議や法務大臣を歴任、日満文化協会会長、溥儀の家庭教師などになる。

1938年、辞任して、旅順で学問をして余生を送った。



羅振玉「甲骨文 条幅」
积文：旧徳先疇人樂其事
和風甘雨天降之祥



羅振玉 甲骨文
「三德基風七言聯」部分
130×31 cm×2 紙本
上海博物館藏
积文：三德六道大学教
(五風十雨康年占)
款識：佐臣仁兄居集殷虛文



羅振玉「甲骨文七言聯」
紙本 130×20 cm×2
积文：有文有史亦足樂
亡車亡魚歸去來



王國維 (1877~1927) 浙江省杭州府海寧県の出身

歴史学者 「甲骨四堂」の一人。著書に『殷周制度論』など多数ある。

字は静安また伯隅、号は觀堂。羅振玉の娘婿で弟子。羅振玉とともに甲骨学の基礎を固めた。

1901年、東京理科大学に留学。脚気のため翌年帰国した。帰国後、上海の学校で哲学、心理学を講義した。

1911年、辛亥革命のため羅振玉とともに日本に亡命。

1925年、清華大学教授に就任。

1927年6月、北京の頤和園の昆明池で入水自殺。

甲骨文字は殷代（紀元前1300年~紀元前1

000年頃）に使用されていた文字である。別名、

殷墟文字、契文、契刻文字、卜辞ともいう。

今までに発見された甲骨は、16万片以上といわ

れる。甲骨文字の数は4500ほど、そのうち解

読されているのが2000字ほどらしい。



甲骨文（亀の腹甲内面骨）



董作賓 (1895~1963) 河南省南陽の出身

甲骨学者 「甲骨四堂」の一人。書、篆刻も能くした。甲骨学の大成者。

字は彦堂、号は平廬。

1928年~37年まで、歴史語言研究所による、殷墟の発掘調査を、李济とともに主宰した。発掘調査は日中戦争で中断されるまで十数回行われた。調査の結果、『史記』に記載されていた伝説の殷王朝が実在していたことが証明された。彼は、甲骨文字を様式によって、武丁~帝紂までを5期に分類した。また殷代の暦を研究して殷暦を復元し『殷曆譜』を著した（1945年）。その他『甲骨文断代研究例』（1932年）など多くの著作がある。

1948年、台湾大学教授となった。1951年には国立中央研究院歴史語言研究所所長となった。



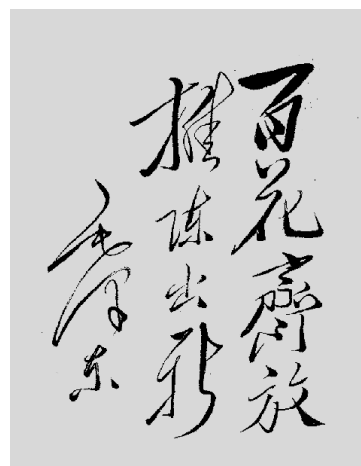
董作賓「甲骨文七言對聯」
1957年 紙本 11×89 cm×2

积文：林泉雨畢魚兒出、
苗風和燕子来。

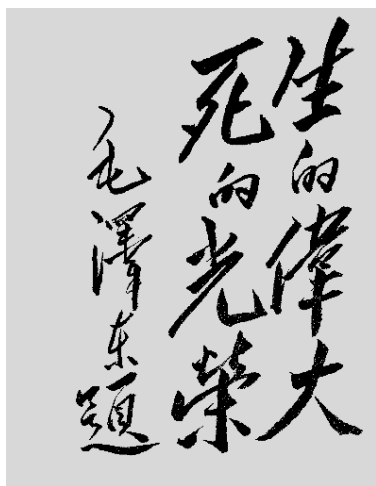


董作賓「甲骨文軸」紙
本 68×32 cm

积文：無尽好、載酒對
林泉。燕舞花下魚自樂、
朝游川上暮言旋、人月
喜同圓。



ひゃっかさいほう すいちんしゅつしん 毛沢東
「百花齊放、推陳出新。毛沢東」
「推」は押しやること。「陳」は古いもののこと。「推陳出新」は古いものを捨てて、新しいものを生み出すこと。

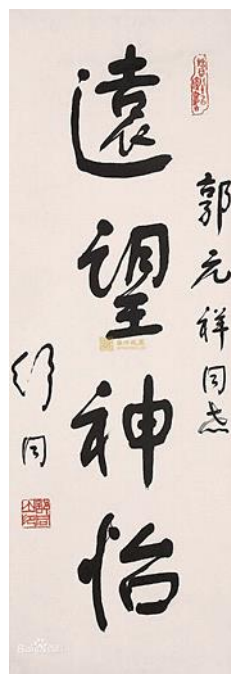


「生的偉大、死的光榮。毛沢東題」
生きるのは偉大で、死ぬのは光榮という意。



毛沢東 (1893～1976)

湖南省湘潭縣韶山沖の出身 政治家、思想家、詩人。
筆名は子任。中国共産党創立党員の一人。中華人民共和國初代国家主席。



毛沢東・舒同・郭沫若の三人を「現代中国の書の三傑」と呼ぶらしい。三人とも政治家であり書家ではない。個性的とは言えなくもないが、この程度で三傑なら書も終焉だ。



舒同 (1905～1998)

江西省東鄉縣出身 名は文藻、字は宜祿。中国共産党員。紅軍書法などなど。書は「七分半書」また「舒体」、「舒同体」と呼ぶ独自の書法を誇っている。七分半書に意味は、楷行草隸篆の各一部、顔・柳の各一部、何紹基半分の合計ということらしい。



郭沫若 北京「故宮博物院」の看板



郭沫若「蘇州桃花塢木刻年画」社の看板



郭沫若「紹興魯迅紀念館」の看板



郭沫若「魯迅紀念館」の看板



郭沫若 (1892～1978)

四川省樂山縣の出身 政治家、歴史家、文学者
字は鼎堂、筆名(号)は沫若、麦克昂など。節操のない風見鶏のような人物。
発見された甲骨全てを分類した『甲骨文合集(第一集)』(1979年に出版)の編集を進めるなど、甲骨研究では大きな業績がある。「甲骨四堂」の一人。
1914年日本へ留学、九州大学医学部を卒業した。帰国し政治活動に励む。1928年、日本に亡命。戦後、中国科学院院長に就任。1958年、共産党に入党。1963年、中日友好協会名誉会長に選任されるなど、数々の要職に就いた。中国各地の記念館などに、彼の揮毫になる看板がある。書風は伝統的俗書である。

近代篆刻

長らく、印は職人によって刻されてきたが、元時代末期、画家の王冕（1310～1359）が彫りやすく、篆刻に適した花乳石（青田石の一種）を発見し、自ら刻した。それ以後、文人が自ら字入れし刻印するようになり、篆刻が芸術として発展していくことになる。

明代の文徵明の長子文彭が、燈光凍石（青田石の中で最上の石）という美しい印材を用いてから、篆刻は芸術として認知されるようになったという。



燈光凍石

文彭は近代篆刻の祖といわれる。文彭以後さまざまな流派が出現した。文彭の印から、印学の二大流派である徽派（皖派・新安印派・黄山派）と浙派（西泠印派）が誕生した。

文彭（1498～1573）



江風
山月



以理聰
言則
中有主

上の二つの印は、浙派の源流となる印と言われる。



佛師
造物

この印は鄧派の先駆となるものと言われている。

徽派（何震・蘇宣・梁裘・朱簡・程達・汪肇龍・巴慰祖・胡唐などの優れた印人がある。）

何震が皖派をひらいた（何震は文彭の高弟）皖派は安徽省にある皖山という山の名からつけられた。



何震の印
蘭雪堂



何震の印
雪中白鶴



朱簡「汪道昆印」



蘇宣の印
我思古人
實獲我心

程達（文彭と何震と朱簡らを学んだ）は歙派をひらいた。程達は停滞していた徽派に新風を吹き込んだ。



程達の印
問雲野鶴



程達の印
守拙



巴慰祖
薰涓



の印
胡唐私印

鄧石如（1743～1805）は皖派の梁裘から学び鄧派をひらいた。

鄧派には包世臣・吳熙載・趙之謙・吳咨・胡澍・周啓泰・徐三庚らがいる。



鐵鉤鎖



梅華
道場



一日
之跡

吳熙載 (1799~1870)

趙之謙 (1829~1884)



黃錫禧印



丑 癸



趙之謙印



庵 悲

徐三庚 (1826~1890)

吳咨 (1813~1858)



黃山壽印



庵 久



父 上于



白雲深
處是
吾廬

黃士陵 (1849~1908)

(1849~1908) 鄧派の吳熙載・趙之謙から学び、黔山派をひらいた。



曾 觀
彦 武



館 藏
延 年



稽 首
令 憲



金 符 齋
十 六

浙派 (西泠印派)

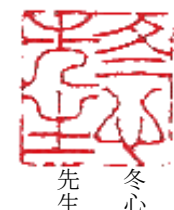
清代前期に、何震と程邃から学んだ丁敬は浙派 (西泠印派) をひらいた。浙派には金農、鄭燮、黄易、奚岡、蒋仁、钱松、陈豫鍾、趙之琛、陈鴻寿、胡震らがいる。



身 印
丁 敬



之 印
金 農



先 生
冬 心



魚 山 人
上 下 釣

黄易 (1744~1801) 丁敬の弟子。西泠八家のひとり。



奚



陽 平



百 金
一 字 值



珍 藏
黄 易
錢 唐

陳鴻寿 (1767~1822) 号は曼生。「曼生壺」を創始した。西泠八家のひとり。



問 梅
消 息



生 穆



錢 唐 孫
均 古 雲
之 印 信

趙之琛（次閑）（1780～1852）
西泠八家のひとり。



陳印 鴻壽



魚 雁



胡 鼻山



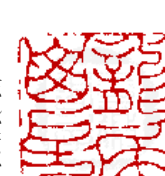
長宜子孫

胡震（1817～1860）
号は胡鼻山人

奚岡（1746～1803）
西泠八家のひとり。



金石 癖



龍尾 山房



託興 毫素



我得 無 諍三昧

陳豫鍾（1762～1806）
西泠八家のひとり。

蔣仁（1741～1795）
西泠八家のひとり。



無地 不樂



蔣山 堂印



仲水 過眼



我書 意造 本無法

錢松（1807～1860）
西泠八家のひとり。

西泠八家とは、丁敬・蔣仁・黃易・奚岡・陳豫鍾・陳鴻壽・趙之琛・錢松の八人のこと。

清代末から民国に、すべての流派が衰え、世間から忘れられてきたころ、丁敬、鄧石如、吳熙載、趙之謙らの篆法を学び、それらを継承し、篆刻芸術に貢献した吳昌碩が吳派をひらいた。

吳昌碩（1844～1927）
吳派 号は缶廬など。



蘭為 同心



倉 碩



倉碩道 人珍祕



缶記

趙石（1874～1933）
吳昌碩から学んだ趙石は趙派をひらいた。



長作田 間識 字民



虞山沈氏師 米齋審定金 石文字之印

鄧散木（1898～1963）
上海出身
名は鉄、字は純鉄、号は散木、養翁など。
人に左右されない独自の篆刻を誇ったが、誇るほどのものではないだろう。独善的。

齊白石（1863～1957）

民国から現代にかけ趙之謙らを学んだ齊白石は、流派をひらく人というより、独立独歩の芸術家であった。



人長 壽



我負 人々當 負我



意苦 若死



跋屨 將軍